

## 第 280 回(6 月)

### ライフ・サイエンス事業の開発

日本モンサント株式会社 常勤顧問 小泉祐二氏

**参加者**：本日のお話では、モンサントは世界的な食糧問題の解決を遺伝子組み替え技術を中心としたライフ・サイエンス技術による植物の増産に見ているように思えたが、家畜とか、沿岸の魚類の品種をライフ・サイエンスで改良することによる食糧問題解決のチャンスもあるのではないかと。モンサントではどう考えているのか。実際には第一次植物の何分の一かは、家畜に食べさせて、それを通じて人間が摂取している。

**講師**：モンサントは当初から植物に焦点を合わせるということで研究を開始した。そしておそらく動物の改良についてはモンサントは手を出さないであろう。やれないわけではない。しかし、動物を改良することに成功しても、消費者がそれを受け入れる土壌ができていないと我々は判断しているのである。

実は牛の成長ホルモンを大腸菌からつくらせたことがある。大腸菌に遺伝子を組み込んで牛の成長ホルモンをつくり、それを牛に注射すると牛乳の生産が最大約 15%増える。しかし消費者からの抵抗が非常に強かった。牛乳が市場に対しオーバー・プロダクションになっていることもあり、これは当初予定していた規模のビジネスになっていない。この場合でさえ相当の抵抗感であっただけに、動物自体をいじるとなると消費者からの抵抗はさらに強いのではないかと。

ご指摘の通り、一回、植物を家畜に食べさせ、その動物を食べるのはロスがある。おそらくは動物の摂取量の 10~15%くらいしか人間にまわってこない。そこで、栄養は直接植物を食べてとるようにすれば、食糧事情は良くなるに違いないと認識している。モンサントが動物の改良の分野に進む予定は今のところない。